図書館だより

名寄市立大学
2009.10.27
増刊号

―読書週間特別増大号―

巻頭言

児童学科　今野　道裕

あべ弘士さんは、当代随一の人気絵本作家の一人である。先日旭川で行われた３ヶ月にわたる美術展も大盛況だった。あべさんが旭川動物園の元飼育員というのは、みなさんよく知っていることと思う。

旭山動物園が世に知られ出した頃、動物園の前園長である小菅正夫さんに講演していただく機会があった。その時、テーマを「動物たちに教えられたこと」とさせてもらいたいというと、ひどく喜んでくれて、「私のことをよく知っている人が考えたんじゃないですか。本当、30 年動物園にいるんだけど、動物に教えられてばかりなんですよ」と快諾して頂いた。

その小菅さんが園長に就任した 1995 年は、年間来園者数 28 万人という少なさだった。その「お荷物」動物園を「日本一」の動物園にしたのは、そんな時代の中でも、小菅さんや飼育員たちが「動物たちに学び」、動物園とは何かと「夢を語り合い」続けたからなのだ。あべ弘士さんは、まさに飼育係として動物の世話をし、「夢」を「14 枚のスケッチ」という形あるものにしていった本人である。

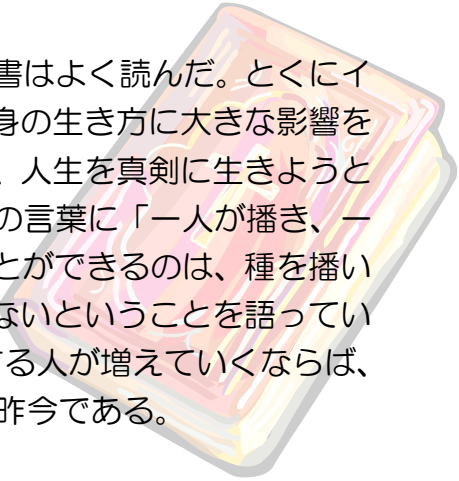
絵本の中の動物たちが生き生きとしているのも、動物のかわいさと命のすごさをみごとに描けるのも、あべさんが動物から学んだことの多さを物語っているのであろう。

動物園とは、動物を見に行くところではない。動物から人間とは何かを学びにいくところなのだ。あべさんも「ゴリラから哲学を学んだ」と言っている。あべさんと学べる学生は幸せである。

思い出の一冊

読書週間ということで、教職員の皆さんに、「思い出の一冊」「人生を変えた一冊」「衝撃的な一冊」というテーマで寄稿していただきました。どなたのコメントも、お人柄のあふれる暖かいコメントで、依頼者も感激しております。皆さんは「思わず夢中になる本」「心揺さぶられる本」「人生を変えた本」に、もう出合うことができましたか？授業の合間に、就職活動の合間に、人に薦めてみたくなるような素敵な本を探してみませんか。

『新約聖書』　　教養教育部　　三島徳三



学生時代に教会の付属寮で生活をしたこともあって、聖書はよく読んだ。とくにイエス・キリストの誕生以降のことを記した新約聖書は、自身の生き方に大きな影響を与えている。キリスト教徒は聖書を信仰の書として読むが、人生を真剣に生きようとする者にとっても、新約聖書は金言の宝庫である。イエスの言葉に「一人が播き、一人が刈る」という言葉がある。これは豊かな実りを得ることができるのは、種を播いた人がいるからであって、その隠れた労苦を忘れてはいけないということを語っている。業績があってもそれを誇らず、謙虚な態度で他人と接する人が増えていくならば、社会から争いがなくなる。大学もそうあってほしいと願う昨今である。

『くまのパディントン』　　社会福祉学科　小野寺理佳

「くまのパディントン」のシリーズを初めて手にしたのは小学生の頃だ。ペルーからひとりでイギリスに密航してきたクマが、パディントン駅でブラウン夫妻と出会うところから物語は始まる。パディントンと名づけられたこのクマがさまざまな冒険騒ぎを引き起こし、ロンドンの保守的な人々の心をやすやすと打ち破っていくさまは何度読んでもわくわくさせられる。パディントンは、礼儀正しく確固たる自分というものをもち、グルーバーさんらが彼を「若いクマの紳士」として遇するところがいい。昔はクマのいる暮らしにただ憧れたものだが、大人になってからは、異国から来た彼が日々どんなことを思っていたのかをついつい考えてしまうのである。

『どうぶつ友情辞典』　　看護学科　舟根妃都美

絵本作家あべ弘士さんの作品の中に、絵本ではない単行本があります。それが、『あべ弘士どうぶつ友情辞典』です。目次には、獅子、豹、虎、象、麒麟、鰐…といったふうに動物の名前がずらりと漢字で並んでいます。動物の章ごとの中味は、その動物についての話はもちろんですが、その動物名が使われる「諺」、「慣用句」、「百人一首」、「伝説」、「思い出話」や「つくり話」が詰まっています。動物についての詳しい内容、心あたたまる内容や、ふっと笑いたくなるような内容がぎっしりです。

『千鳥』の章は、北海道の百人一首の紹介からはじまり、途中からは、あべさんの得意札について述べられています。

『小さい頃は「むべ山風を……」とか「山の奥にも……」が得意だった。中学校の頃は「我衣手は露……」の“我”のつく札が好きだった。好きな札は絶対に相手には取られたくないし、相手側にあれば必ず取った。高校生になった。隣の席に美しい娘が座り、目が点になった。毎日学校へ行くのがたのしみで。その娘の名前が「いくよ」といった。以来、わたしの最大の得意札は「淡路島　かよふ千鳥の　なく声に　幾夜ねざめぬ　須磨の関守」になった。ところがまたしても好きな札が変わった。高校三年の時、（つづく…）』読んでいると、思わず微笑んでしまいます。

そして、この本の最後の章は『人』です。あべさんはこの章で、『かつてそうであった「ヒト」も「ひと」も、わたしは好きだ。でも、大人になり、子ども時代とは比べものにならないほどたのしい、いまのわたしの「人」のほうが、もっと好きだ。』と書いています。そんなふうに語れるあべさんの生き方が、私は好きです。

いわさきちひろの絵　　児童学科　三国和子

私には、以前からとても大切に思う絵がある。それは、いわさきちひろが子どもを描いた絵。最近は、とくに女の子を描いた絵が自分の娘によく似ているから、余計愛おしさを感じる。どの年齢の子どもの絵を見ても、過去と現在、未来の我が子の姿を重ねてしまう。思い返せば、もっと以前、甥が子どもの頃も、ちひろの絵に似ていると思った。きっと、ちひろの絵は、ふっくらした頬や柔らかな肌の質感、かわいらしい仕草や表情など、どの子どもにも通じる普遍性を持っているのだろう。いわさきちひろの絵が挿絵として使われているだけで、その本に安心感を覚えてしまう。このように、本は雄弁に語るだけではなく、無言で癒してくれることもある。

栄養学科　三輪孝士

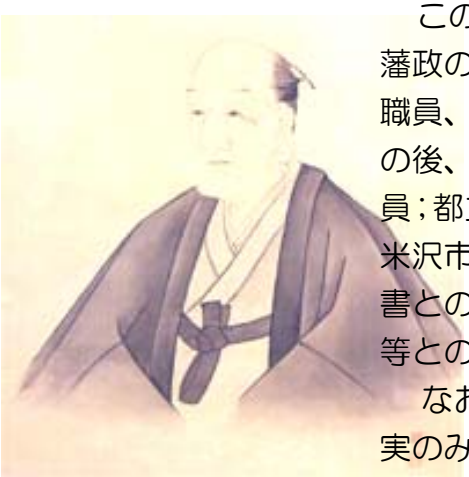
食欲の秋（名寄ではもう冬ですが…），私がおいしい料理を食べたくなったときに思い出す本があります。以前，話題になった日本料理店「吉兆」の前主人湯木貞一氏著の『吉兆味ばなし』（暮らしの手帳版）です。目次には，「なすが出て夏がやってくる」「初秋と野菜とはもと」など四季折々の食材についての話やその料理方法が書かれているのですが，そこには一切写真や図表は出てきません。しかし，頭の中にはどのような料理なのか，包丁は食材についてどのように入れるか，自身が思う器にどのように盛り付けるかなど，頭の中はひとり日本料理食べ放題状態となります。

ただ，いずれの章にもある言葉が，日本の季節と料理のいわれと食べる人の立場に立った切り方や盛り付けです。これは，日本の四季の素晴らしさと思いやりの心ではないでしょうか。忘れないようにしたいものです。

一冊との出会い　　教務課・学生課　久保和幸

旧風連町職員時代、二昔以上も前のことだ。当時大型プロジェクト事業に関わっていた。

国・道のお役人から申請書の提出期限を２ヶ月早めるよう求められ、困惑をしていたときに偶然雑誌にあった「成せば成る（以下略）」の一行が目に留まった。誰の言葉かを探り当て、弱い自身を補うつもりで目にした書が『小説上杉鷹山』童門冬二著である。



この書は、米沢藩主の鷹山が、財政危機に直面している藩政の改革について触れられており、藩を自治体、武士を職員、庶民を市民に置き換えられるよう示唆している。その後、行政職員の知人を介して作者（本名太田久行、都職員；都立大学事務長・政策室長歴任）に会うことも叶った。米沢市にも２度程足を運び足跡を偲ぶことができた。以上、書との出会いによって自身が救われ、書が人・地域（まち）等との出会いを導いてくれたように思えてならない。

なお、上杉鷹山を紹介する著書は、藤沢周平著の『漆の実のみのる国』、内村鑑三著の『代表的日本人』がある。

社会福祉学科　松岡是伸

「人との出会いの大切さ」「人が好き」などと軽々しく我々は言ってしまう。しかしこの小説の読了後、それがいかに困難なことであるかを思い知らされる。そして人とのつながりの難しさ、不安定さ、危うさを気づかせてくれる。

そもそも対人援助職は何かと言えば、人とのつながりや良好な関係性を求める。人間関係においてこれくらい詭弁なものはない。小さい頃からひとりで生きていける様に教育されてきたにも関わらず、大人になると他者との関係を求められる。現代社会の病理がこの根本的な人と人との関係性の中に隠れている。

人との関係性に焦点をあてつつ展開される本書は、15 歳の少年〈おまえ（主人公シュウジのこと)〉が、人とのつながりを求め続けた歴史である。その中では孤独、殺人、セックス、暴力、そして親子関係の崩壊、友人関係からの排除、人間関係の中に潜む差別、偏見、レッテルが描き出される。

この本書のメッセージである「どうして、人間は死ぬの？」「誰か一緒に生きてください」の中に込められている意図を読み取り、人との関係性を考えることができる一冊であると思う。

○ 重松清『疾走』（上・下）平成 17 年 5 月 25 日初版

思い出の本『アイヌの碑』　　教養教育部　マーティン メドウズ

私の思い出の本は、萱野茂の『アイヌの碑』です。私はこの本と来日一年目に出会い、アイヌ文化について興味を持つようになりましたが、最近また読む機会があって、改めて感動しました。この本はアイヌ文化の啓蒙家である萱野茂氏の自伝ですが、良く読んでみると、日本人は単一民族であるという説は誤りだということを教えてくれる本でもあります。萱野氏の生涯からわかるのは、北海道の原住民であるアイヌの人々が倭人（日本人）の弾圧から自分たちの異なった文化や言語を守るために必死に戦ってきた歴史です。私は一回萱野氏にお会いしたことがあり、アイヌ文化を伝えようとする姿に感銘したことを今でも覚えています。アイヌの歴史に触れたことがない学生には、是非この本を読んで欲しいと思います。

「文明を変えた本」は誰も読まない　　児童学科　鈴木文明

「人生を変えた本」、難しいお題である。もしも私が尊敬される人物であれば、人々は「文明のようになれるのなら」と、かつて私が読んだ『純粋理性批判』も、『論理哲学論考』も、『天才バカボン』も読むに違いない。しかし、人々にとって私は「あのようにはなりたくない」存在である。実際、「文明のようにハゲたい」と言う声はこれまで一度も聞いたことがない。そればかりか、ハゲ友であると信じ切っていた北村先生までもが、「オレは文明と違うハゲ方で良かった」と、言っている。よって、「文明を変えた本」なんぞ、誰も読むはずがないのである。

さて、以下は私の数年前の年賀状である。

お元気ですか。
私は元気に暮らしています。
しかし、時々仕事を辞めたくなることがあります。
「体調がとても悪そうですね、大丈夫ですか」
「もうあまり長くは生きられないような気がする」
「えっ？そんなことになったら私たち泣いてしまいます」
「長くもったとしても、おそらくあと 50 年ぐらいしかないと思う」
以降、学生たちから私を心配する声を聞きません。もしも明日、私が息も絶え絶えに雪道で倒れていても、学生たちは「たしかあと 50 年生きるとか言ってたから大丈夫」と、私を跨いで通り過ぎてしまうに違いありません。どれほど手塩にかけて育てても、学生とは薄情なものです。さらに、学生の貧しい感性にも呆れます。
「着替えるのでちょっと研究室の外へ出てくれ」
「別に大丈夫です、どうぞ。いつもお父さんのを見ていますので」
「父親と一緒にするな。この私から〈男〉を感じないのはおかしい！失礼だ！」
「すみません。カオとアタマがおかしいとは感じていたのですが」
今年もきっと面白くなると思っています。

「正月早々ふざけている」と、たまにお叱りを受ける年賀状であるが、かつての私は面白くも何ともないものを毎年書き送っていた。「ふざけた年賀状」をしたためるようになったきっかけは、土屋賢二の著書との出会いであったかもしれない。氏はお茶の水大学の哲学の教員でギリシア哲学の研究者である。『われ笑う、ゆえにわれあり』、『哲学者、かく笑えり』、『人間は笑う葦である』等々数多くの著作がある。相当な知識人であり、かつ論理的思考に秀でている人でなければ書けない笑えるエッセイ集である。

「文明を変えた本」はお薦めできないが、「文明の年賀状を変えた本」を是非読んでいただきたいと思う。

「一冊の絵本との出会い」　　教務課　得能あけみ

『あらしのよるに』という絵本との出会いは衝撃的でした。

偶然手にして、ヤギのメイとオオカミのガブが出会うシーンからストーリーの面白さに引き込まれました。コミカルだけどちょっとスリルがあって初恋に似たドキドキ感がありました。さらにメリハリを効かせた線で描かれた大胆な絵も魅力的でした。その後は 6 冊を一気読みしました。理解しあえない関係なんてこの世界には存在しないという熱いメッセージが伝わってきます。絵本が大好きな私にとって絵本は「選び抜かれた言葉で物語をつくり、想像の手助けをする程度の絵の中で読み手の映像を倍速させる」そんな「時間をわすれさせてくれる友人」です。

【リクエストサ-ビス】

日本の図書館の場合、要求された資料に対して、所蔵の有無にかかわらず図書館側が何らかの方法により一定期間内に提供することをいう。

1）図書館用語辞典編集委員会『最新図書館用語大辞典』2004 柏書房 p 599

今回、「思い出の一冊」のコーナーで紹介されている本を読んでみたいと考えたとき、あなたならどうしますか？本屋さんで探してみる？図書館で探してみる？インターネットを使って詳しい書誌情報を探してみる？いろんなパターンが考えられます。でも、まずは大学図書館の OPAC で、書名検索をしてみましょう！！本学図書館に所蔵のある本もあるはず。自分で借りられない場合（大学図書館、市立図書館にないもの）は、リクエストに出してみてください。購入できるものは、購入検討しますし、購入できないものは、相互貸借を利用して、他の大学図書館から借ります。

「うちの大学図書館は本が少ないから・・・」とあきらめないで、読みたい本は、どんどんリクエストしてみてください。リクエストボックスも設置してあります。

＜前回の解答＞

図書館だより第 3 号の中でレファレンス問題を出したところ、3 名の方が参加してくれました。3 名とも見事に正解。景品をゲットされました。おめでとうございます。

「玉蜀黍」は「とうもろこし」と読みます。わかっていた人も、辞典、百科事典などで、調べなおすと、意外に知らなかった真実があるかも。レポートで煮詰まったとき、新たな切り口が見つかることも！！『参考資料』大いに利用してみてください。

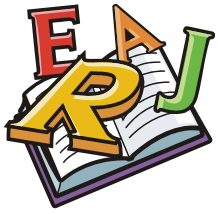
……お 知 ら せ……

あべ弘士　絵本展！！

日時　10月27日(火)　～　11月9日(月)
9:00　～　19:00
場所　　名寄市立大学図書館　展示コーナー

　読書週間にあわせて、本学短期大学部特任教授である、あべ弘士氏の絵本展を開催します。2009年７月18日～10月４日まで 北海道立旭川美術館で行われていた「あべ弘士　動物交響楽　ー交差するいのちの詩ー」展に展示されていた、本学短期大学部児童学科１年生が作製したジオラマとともに、本学所蔵 111 冊の絵本を展示。ぜひ、あべ弘士の世界を堪能してみませんか？　笑いあり、涙あり、新発見あり。思わず夢中になれるかも!!

予 告　手づくり絵本展



あべ弘士絵本展に引き続き、「手づくり絵本展」を開催予定。毎年、短期大学部児童学科２年のコミュニケーション英語Ⅰの授業で取り組んでいる、英語の手づくり絵本と、名寄手づくり絵本の会、名寄市立大学手づくり絵本サークルのコラボレーション。

COMING SOON

どんな作が揃うか乞うご期待！！

日時：11月12日（木）～11月20日（金）
9：00～19：00
場所：名寄大学図書館本館展示コーナー（視聴覚ブース前）

――― 編集後記 ―――

読書の秋です。最近は雨が続き、キャンパス内の紅葉も、すっかり落ちてしまいました。今回の写真は雨の合間を縫って、お日様を待ちわびての本館前の紅葉です。鮮やか!!　雪虫も飛び始めました。あと何日かすると降っちゃうんだろうな…雪。寒～い夜に、ゆっくり読書楽しんでみませんか。

2009年10月27日発行　増刊号
名寄市立大学図書館運営・大学広報委員会
〒096-8641
名寄市西４条北８丁目１
名寄市立大学図書館